

知的に構成された小説『日の名残り』

「蝶の雑記帳 88」

夏に、テレビの番組表で気づいて録画したイギリスの映画「日の名残り」を観た。カズオ・イングロの小説を映画化した作品である。イギリスの貴族の館を舞台に始まる映像が、おのずと生み出す雰囲気と気品を保って、静かでおちついた一つの物語を進行させる。物語と言っても劇的なものではない。ずいぶん抑えた感情表現で、わずかなほのめかしかけのやりとりで、背後にあったはずの心の動きを推測しなければならないのである。しかし、映画は余韻を残すものだった。主演の男優と女優の演技もなかなかのものだと思った。その名を初めて認識したアンソニー・ホプキンスは、言葉の奥にある心理を表現するのに成功している。それと、好ましい役を演じた女優エマ・トンプソンという人、地の人柄が現われているのかしら。相互の影響は避けがたいとしても、イギリスの映画はアメリカの映画と異なるものをもっている。俳優もイギリスの人はその古い社会の文化を身にまとっている、と考えてよいだろう。

主人公の執事と相方の女中頭の描き方は、小津安二郎の映画に似て抑制されたものである。それでも、人間の動作を映し出す映画は、言葉以上のものを表現することができる。映画の最後に、貴族の館で献身してきた執事がウェイマスの棧

橋で夕暮れを過ごす場面がある。そこで、主人公の思い出は苦いものとなったことが分かるけれども、自分の人生の残映をかみしめているその情景を味わい深いと思った。

2017年、ノーベル文学賞がカズオ・イシグロに贈られたとき、わたしは名も知らなかった。作者が日本の出身だと聞いてその小説を読んでみようと思ったのに、そのままになっていた。この夏たまたまその映画作品を観たおかげで、原作の小説を読む機縁が訪れたのである。

英語で書かれた小説を読む力はない。ハヤカワ epi 文庫に収録された訳書を買った。ノーベル文学賞をもらった作家の代表作の一つだ、インターネットで作者がどういう人かを調べ、訳者あとがきにも目を通して心構えをした。K・イシグロは、海洋学者の父がイギリスに職を得たことで、両親について五歳でイギリスに移住したのだという。1980年代から小説を書き始め、『日の名残り』を書いたのは三十代半ば、その年1989年、英語圏で最高の文学賞とされるブッカー賞を受賞したという。家庭では日本語を使ったようだが、イギリスの社会で生活して教育を受け、英語が培ってきた文化を十分に身につけて、巧みな小説を書くことができるほどになったのだ。

その日本語版には丸谷才一の解説があり、読者を導いてくれる。わたしは、小説に入る前にそれを読み、読後にももう一度ていねいに読んで自分の読みを点検した。日本の古今の

文学に通じ自身も小説を書き、また、あの『ユリシーズ』を翻訳した優れた英文学者の解説である。わたしの読みの足りないところを大いに補ってくれた。小説『日の名残り』について、その解説以上のことを書くことはできない。

それなのにこうやって書いている。映画を観、原作も読んで、感じた一片を何か記したいのである。見なおしてみれば、「蝶の雑記帳」の大半はそういう未練がさせる覚書と言える。だが、自分のための雑記帳だから仕方がない。破棄してしまうと貧弱な記憶にとどまることもなくなるので、もうちょっと続けてみる。

表題を仮に「知的に構成された小説」としてこの雑記を始めたのだが、そう感じた理由を挙げながら、物語をおさらいしておこう。

この小説は、たいそうなお屋敷で立派に職務をつとめてきたと自負している執事の回想の形式で書かれ、言葉づかいは慇懃である。取りようによってはもって回った言い方である。一貫してお屋敷の主人に対する全幅の尊敬を表現し、自分の献身を理屈づけるような考察まで加わる。語りは、人の記憶が必ずしも正確でないことを踏まえ、いつも言い直され、断定を控える。進行するできごとにも会話の奥にもしばしばユーモアが潜めてある。また、執事の心中に言葉に出さない動きがあることを巧みに示唆する。彼の動揺は、ほかの人が彼

のようすを見て心配する発言で明らかになるというしかけまで施されている。思わず微笑を浮かばせるそれらの書きぶりが、わたしに背後にいる書き手を意識させる。

仕える侯爵(?)が当然重要な登場人物だが、その家族はいつさい登場しない。友人とその息子(侯爵の名づけ子)が出てくるぐらいで、あとは、屋敷を訪問する客人たちが執事の対応する相手である。重要人物である客人は、ヨーロッパの歴史を左右するような会談もしくは“国際会議”のために来るのである。執事は、心服する主人のためにその大事な会議が成功するように献身的にサービスし、わずかにでも歴史に参加しているつもりでいる。その働き盛りがイギリスにとってどういう時代であったかが、歴史的背景として重要である。そういう場でミスター・スティーブンスがどれほど品格をもって職に忠実であったかの記述がこの小説の主軸をなす。しかし、時代背景はまだ残映を保っていた大英帝国のよき時代を映すものではあるけれども、それを歴史の記述として過大評価してはいけないとわたしは思う。作家は、あくまでも舞台回しのため、歴史の一側面に脚光を当てたのだと思う。もっとも、英国の読者にはその記述が十分に感慨を与える、ということはあるだろう。そうでなければ、多くの読者を得てフッガー賞を獲得することは起きなかったかもしれない。

小説のもう一つの主題は相方の女中頭との関係である。大きなお屋敷だから、二十人を超える使用人がいるはずなのに、

執事が語るのは女中頭のミス・ケントンのことだけ。もちろん、客人が料理をほめるのにコックの名は必要だけれども。ミス・ケントンとのやりとりこそ抑制的に語られる。二人の心中を押し量ることもむずかしいくらい。しかし小説だから、読者は、いつも登場する彼女とのあいだに心の交流が起きていたと期待する。もう一人、スティーブンスの高齢な父親が副執事として参加する。その高齢が仕事に支障をきたすことを指摘するミス・ケントンに対し、父を尊敬するスティーブンスが対応に遅れる話がある。これはスティーブンスとケントンの人柄を表現するものとしてあるのだろう。その父は国際会議ただなかで途中で死ぬが、父の死に目に立ち会えないままサービスに徹するスティーブンスの、職務に対する献身を際立たせる情景設定である。そして、ケントンがスティーブンスの気概を見て尊敬の念を抱いたであろうことが、行間ににじませてある。しかし、スティーブンスの職務への一途さがそれ以上の人間的な関係を進展させない。そして、ミス・ケントンは結婚するためにお屋敷を去ってしまう。

すると物語は戦後に移って、執事は、売りに出されたお屋敷を買い上げたアメリカ人に仕えることになる。これは、背景にある歴史、つまり、イギリスの地位が低下し世の中が変わったことを反映しているのだろう。そして、快活な新しい主人が執事のあり方を変える契機を提供する。

さよう、ミスター・スティーブンスの語り口に倣って言え

ば、この作品は、長い年月に起きた多くのことを省略して、限定した少数の要素だけを構成して小説を組み立てているのだと存じます。わたしの挙げなかった要素の限定がまだあることと思います。そうしますと、この小説は、比喩的に申しまして、音楽を構成作曲するように作り上げられている、と言うことができます。実際、その構成の仕方は一定の形式に従っております。執事は、新しい主人がアメリカに帰っているあいだ、主人の車フォードの提供を受けて短い旅に出る幸運に恵まれるのですが、長い年月のことをその六日間の旅行中の回想として語るのです。まるで、楽曲を楽章に分けるように。

楽章の数はやや多くて、一日目から四日目までが六つ、そして六日目が最後の第七楽章です。四日目の午後に、二十年以上も経ってミス・ケントンとの再会を果たすのですが、その楽章では、楽曲を高揚させるはずのアリアは歌われないのでございます。その準備の楽想が奏でられるだけです。五日目がとぼしてあるのは、この小説が採用した形式を重んじて、物語を主人公の回想としてしか記述しないからです。たった二日前のミス・ケントンとの談話も回想としてしか語られないのです。

小説の要素の限定とそれを構成する形式は、いわば理論的にしっかりと定められていると申せましょう。もちろん、十分な長編の小説ですから、各章の回想に、当日あったできごとを重ねて楽想に変化をつけることもおろそかにされませ

ん。旅は 1956 年ころのこととされていますから、その旅は、ずいぶん昔の思い出を反省させるのです。旅のできごとは、本当は以前からあった主人に仕える職務一辺倒のあり方への懐疑を意識にのぼさせます。もともと、それもあとの方まであいまいにしか表現されないのをごさいます。

こう見てきまして、この小説は理論的な方法で書かれていると思うのですが、作者が 26 歳ころ大学院に入って創作学科で学びながら小説を書き始めた、という経歴を知ったからそう推量するのでございます。名作はみな巧みに構成されておりますが、この小説は、とりわけ方法的な構想を経たうえで書き下ろされたのではございませんまいか。インターネットのどこかに K・イングロは 4 か月でこの作品を書き上げた、と書いてありました。その前に、題材の調査などの準備をしたようです。作品は、十分に知的な検討を経て形式を含めた構想がまとまってから書かれた、と考えてさしつかえありません。4 か月間というのは短く聞えますが、スタンダールが 52 日間で口述筆記させた『パルムの僧院』とくらべれば時間をかけたと言えるでしょう。ワード・プロセッサがすでにあった時代です、能率的な推敲もできたのではないでしょうか。

主人公が回想を語るという形式は、文章の味になにほどか制約を加えているかもしれません。筆力ある作家の文章では、

紡がれる言葉が自然に成長してストーリーを形成していて、読者をぐいぐい引きこむということが起きます。わたしは、イシグロの文章も人を誘いこむと思いますが、少しちがったやり方だと感じました。ところで、丸谷才一さんは「イシグロがイギリス小説に新しくもたらしたものは、時間といふもの、歴史といふものの、優美な抒情性かもしれない」と言います。それは、イシグロが華やかな近景だけ描写して歴史を間接的に表現するやり方に負っているのだと思われます。

「抒情性」という言葉については、わたしは別のことを感じました。多くの小説のように地の文章を連ねながら会話を挿入する場合には、一見客観的で説明的な叙述が情景をととても抒情的にすることが可能です。詩人の素質をもつ作家ならそれが際立つでしょう。これに対して、主人公が風景を語る場合には主観の混じったものになります。近代小説の登場人物はたいてい普通人ですから、その人が風景をあまりに抒情的に語っては違和感を生じてしまうでしょう。イシグロは、そういうやり方を採らないのです。こういうことも、この小説の形式に注意させることになった一因だと思います。

わたしは、ささやくように文章を読みました。翻訳者土屋政雄さんの日本語は明瞭で、ミスター・スティーブンスの丁重な物言いを乗せるにふさわしく端正です。朗読の心地よさを感じました。ただ、いつもよりも時間をかけたその読み方が、作者を意識するようにしたのだと思います。詮索をしすぎた読み方を丸谷才一さんに笑われそうです。でも、言って

おかなければならないのは、わたしが十分に楽しみながらこの小説を読んだということでございます。さよう、日本の文豪者夏目漱石の言う、小説が醸し出す「情緒」をたしかに味わいました。

主人公が心服する主人に自己を抑制して仕えてきたことを誤りだったかもしれないと考えるようになる変化は、それまでの調子と同じくそれとなく示すやり方で語られます。しかし、もう一つの大事な主題ミス・ケントンとの関係は、最終小節直前で、もっとはっきりと語られます。ミス・ケントンいやミセス・ベンとの再会の場面で、ミスター・スティーブンスは彼女の言った重大な言葉をあいまいにはしません。それは、小説のクライマックスに必要な言葉だからでもあります。ミセス・ベンは、「私の人生はなんて大きな間違いだったことかしらと、そんなことを考えたりもします。そして、もしかしたら実現していたかもしれない別の人生を、よりよい人生を——たとえば、ミスター・スティーブンス、あなたといっしょの人生を——考えたりするのですわ……」と言うのです。

するとここで初めて、ミスター・スティーブンスは、それまで自分のことを本当には語ってこなかった態度を改めて、「おわかりいただけるでしょう— 私の胸中にはある種の悲しみが喚起されておりました。いえ、いまさら隠す必要はありませんまい。その瞬間、私の心は張り裂けんばかりに痛んで

おりました」と、心情を吐露するのでございます。しかし、かなり年長の男と孫のできたばかりの女性は、それぞれの人生を歩んで来てこれからもそうするだろうことを知っています。男はかみしめるように言います、「おっしゃる通りです。…いまさら時計をあともどりさせることはできません。…私どもは、みな、いま手にしているものに満足し、感謝せねばなりませんまい……」。

さて、丸谷才一さんの解説以上のことは言えないと言いながら、冗長な文をつづってまいりました。そろそろ切り上げなければなりません。最終小節でもユーモアを湛えた文章が続きます。丸谷さんは、「わたしは、男がこんなに哀れ深く泣くイギリス小説を、ほかに読んだことがない」と言います。けれども、該当する箇所はどこにも、哀れ深く泣いたという描写はありません。夕方の棧橋のベンチにならんで座った男が、「おやおや、あんた、ハンカチがいるかね？ どこかにもっていたはずだ。ほら、あった。けっこうきれいだよ。朝のうちに一度鼻をかんだだけだからね。ほら、あんたもここにやんなさい」という記述でそれを表現するのです。

ここで、作者は登場人物たちを温かいまなざしで見つめて丁重に扱うということを指摘する必要があります。温厚な作家イシグロは、自分の小説の語り役を果たし終えた主人公の、たいへん苦い人生の回顧をそのままにしておしまいにすることはできません。

「……私は自分が価値あることをしていると信じていただけなのです。自分の意志で過ちをおかしたとさえ言えません。そんな私のどこに品格などがございましょうか?」と後悔するミスター・スティーブンスに対して、隣に座った男が言います、「…あんたの態度は間違っとるよ。いいかい、いつも後ろを振り向いていちゃいかんのだ。…あんたもわしも、必ずしももう若いとは言えんが、それでも前を向きつづけなくちゃいかん。…人生、楽しまなくっちゃ。夕方が一日でいちばんいい時間なんだ。…夕方がいちばんいい。わしはそう思う」と。この男の発言が、ミスター・スティーブンスが悔恨に沈みこむのを抑制して物語は収束を迎えます。

人生を回顧して過ちのあったことを悟る男の小説は、その悲哀を美しい夕暮れの残映に包んで終わる。なおも、主人公がお屋敷の現在の主にジョークを返そうと考えるというようなおかしみを湛えて…。